

第4回「泉大津市オリアム随筆賞」

【佳作】

命のカーディガン

矢野耕太・東京都

「おかあさん、おいしいね！おばあちゃん、おいしいね！」

病院食の味噌汁に歓喜する五歳の私。前日の転落事故が嘘のようなはしゃぎぶりだったと云います。二階の窓から転落した私は、頭をコンクリートの地面に強く打ち付け、病院に運ばれていました。

緊急入院後、丸一日の絶食で猛烈な空腹状態にあったせいでしょう。飛び上がらんばかりに美味しかった味噌汁の味。事故の翌日には元気に食せたほど、それは奇跡的な軽傷で済んだのです。

不思議がる担当医が事情を呑み込みに、そう時間はかかりませんでした。軽傷で済んだのは、転落の際に身にまとっていた衣類のおかげでした。頭と地面間のクッションになっていたのです。

衣類……。それはカーディガンでした。その日私は友達といっしょにヒーローごっこでも楽しんでいたのでしょいか、カーディガンをマントがわりに首に巻いていたのです。私の記憶にうつすらと残る転落の瞬間……。窓のへりに登って手を振る私。友達の姿が見えなくなり窓から部屋の中へ降りようとする私。その瞬間の、なんとなく浮遊したような感覚……。ここから記憶は途絶えます。まっさかさまの落下。

その時、マントに見立てて首に巻き付けていたカーディガンが、落下の勢いでひるがえり、頭を丸ごと包む……。こんな偶然が起こったのです。

ドスンという鈍い音を耳にした隣のおばさんが母に伝えます。

「何か落っこった？」

台所から外を覗いた母の目に飛び込んできたのはマントに包まれた頭をかかえ、うーんうーんと唸りながら地面に横たわる我が子の姿でした。

母は私を抱きかかえ、おんぶしようと思いました。異変に気付いたのはその時です。母の肩をつかめません。腕を挙げる力が入らないのです。

「しっかりつかまりなさい！」

ここから母の血相が変わります。ぐったりとする私を抱きあげ、二つ上の姉を置き去りのまま、タクシーに飛び乗ったのです。

職場から飛んできた父。泊まり込みに備えた布団を背にかつぎ、二時間の道のりをデイズル機関車に揺られ駆けつけた祖母。一人で置いておかれた七歳の姉。そんな家族の心配や不安をよそに、翌日は味噌汁に舌鼓を打つほど無傷な私。もしもカーディガンがなかったら私の頭は直接コンクリートに叩き付けられ、命を落としかねない事態になっていたのです。

五歳の私を救ったそのカーディガンは水色のニット生地。母の御手製でした。

母は、家計の苦しさから「洋裁」を内職にしていました。ワンピースやセーターやブラ

ウスなど、女性物の注文を安い値段でとってきては丁寧丁寧に作ります。そんな母が一度だけ男物を作ったことがあります。それがこの私のカーデイガンでした。ニットのカーデイガンをはと月ほどかけて編み上げてくれたのです。左胸には赤と黒の二色のヘリコプターが編み込まれていて、これが私のお気に入りでした。マントに見立ててはしゃぐのも無理ありません。

味噌汁に歓喜する無邪気な姿は、母や祖母の目にはどのようなように映ったのでしょうか？我が子、我が孫の無事を、どれだけ喜んだことでしょうか。担当医に掴みかからんばかりに救命を訴えた父の、拍子抜けした顔。味噌汁にはしゃぐ元気な孫を見届け、布団を背負って帰って行った祖母。「置いておかれた私」という思い出でしかない姉。

いろいろな人の気持ちをもて遊んでしまった私の転落事故とカーデイガン。半世紀も前の出来事です。あれ以来一体いつまで着ていたのか、もう記憶がありません。既に鬼籍に入ってしまったが、まだ若い頃の母の写真を見るたびに、あの出来事が思い出されて仕方がないのです。

もしも内職など不要な豊かな家庭だったら。もしも母が私のカーデイガンを編んでいなかったら、この世にあのカーデイガンはありません。もしもヘリコプターの編み込みがなくて、私のお気に入りでなかったら、あの日私は「命のカーデイガン」という名のマントを羽織ってはいなかったのです。